

徳永直の会会報

第61号

新資料発見

会長 高木陽助

昨年七月、歴史家の水野公寿先生からお便りを頂いた。

「前略 徳永直の短篇、偶然みつけましたのでコピーしました。見出し『近〇学生気質』の二文字目が不明です。県立図書館か市立図書館のマイクロフィルムでは何とか読めるのではと思います。全体を拡大コピーすると読みやすくなると思います。『徳永直の会』の会報に掲載されてはと思います。

七月三日 水野とあつた。

会報六十号（記念特集号）で前会長の中村先生から「まず作品発掘から始めよう」という貴重なご提案を頂いていた。ちょうど六十号（記念特集号）を会員に発送した直後であった。早速県立図書館でマイクロフィルムで不明な文字を調べたが、「近」のあとの文字はわからない。中村先生にも相談した



「九州新聞」昭6.11.1

目次

- ・新資料発見 高木陽助……p1
- ・「近 学生気質」徳永直……p2
- ・徳永直に関する一つの謬論 金野文彦……p3
- ・『太陽のない街』の比喻表現 和田崇……p5
- ・杉野健一氏逝く 中村青史……p6
- ・徳永直文学散歩⑥……p7
- ・句集『寒祭』・労働を詠む 永田満徳……p8
- ・その他「会計中間報告」等……p9
- ・「第36回孟宗忌」の案内……p10

が、わからない。その他どうも怪しい文字もあったが、一応わかる範囲で読んだ。本号の最初に掲載したので、ご指摘があったら遠慮なく教えて欲しい。

嬉しいことは続くもので、一九四一（昭和一六）年十月に満鉄鉄道総局附業局から発行された雑誌『拓友』に掲載された単行本未収録作品「妹よ」という作品が中村先生の下に届けられた。こちらは少し長いので、作品集として製本化し、孟宗忌までには届けようと思っている。

混乱の時代。先の衆議院議員選挙に於いて、三年三ヶ月続いた民主党政権が崩壊し、自民党が圧勝した。再度自公政権が誕生したのである。我々働く労働者の生活はどう変わるのか、変わらないのか。何だかキナ臭い話も聞こえたり、聞こえなかったり……。国民の心からなる願いは期待どおりに届くのか。

「近〇學生氣質」

徳 永 直

「お忙しいところすみません」

朝早くたづねてきた一人の学生が、そう云つて私のまへに、ムツと座つた。久留米絣に袴の両肩の張つた恰好から云つて、まったくムンツと座つたのである。

「お手紙を見ました……。」

私はまづそう云つて相手をみた。二度ほどの手紙では、このM大学生は、何でもいから職を探してくれといふのである。急速に没落してゆく小地主である郷里の親許からの血の出るやうな送金を遣い果して卒業しても、就職口がなければムダだ、一そ今から労働者にならうといふ、ちかごろでは随分多い「学生式」の身上相談だつた。

「返事をかくつもりでしたが、実は君のいふ何でもいい職がめつからんでね」

「は」

失望するだらうと思ひながら、そう云つたが相手の学生は案外平気だつた。そして茶を啜つてから自分から云ひ出した。

「ボクあれから履歴書十二通出し職業紹介所も一ト月ほど通つたがダメです」

「それでせうね」

「だからボクは……」

ロイド縁の眼鏡の奥で、二三度まばたきしてからズバツと学生式に云つたものだ。

「就職の秘訣、秘訣と云うのがあれば教へてもらいたいと思つてきました」

「そんなものはねえや」

私はフキだしながら、ツイ地言葉で云つた。手紙によると、この学生は柔道二段の剣道初段といふ。私のうちへくる学生はたいてい左翼的な者ばかりだが、此の学生は手紙の中でも云つてゐるやうに、マルクスも知らないし、レーニンも知らないと云つてる男だつた。フキ出した私の顔を無邪気な眼でみてゐるのだ。

「失業者が、増大するのは資本主義社会の必然だが」

そんなことを言つたところで役にたためと思つて私はやめた。この男はとにかく食はなくてはならないのだ。

〇

「もし君が労働者だつたら、紹介状もクソもない。身を投げ出しで新聞配達でも人夫でも何でもやるんだらう、まづ喰うためにはね、それがヒケツといへばヒケツだよ」

学生は黙つて俯いてゐた。

「そんな職だつて沢山はない。しかし労働者だつたら黙つてカツエ死にはしないさ」

私は最後の言葉にいろんな意味をこめて云つたが、黙つてる学生には、ハツキリとは呑みこめないらしかつた。

〇

それから二ヶ月ばかりして、その学生がヒヨッコリ台所の方から顔を出した。

「こんにちは」

「おや？」と思つた私はその学生をみた。どうして立派な「クツ屋」

だ。

「よう、やったね……」

そう云はれて新米クツ屋は、上り口に腰かけてへ々と笑った。真黒に日焼けした顔だが、とても朗かだ。

「儲かるかね？」

とひやかすと

「けつこう喰えますよ、雨がつぶくとこまるがね」

出された茶を呑みながら、態度までガツシリと落ちついてゐる。

「あれから、すぐ初めたんですよ」

「なるほど」

「ちかごろはだいぶ馴れてね、問屋相場でも一人前ですア」

「そりゃいい」

「それにボクはちかいうち工場へ入るかも知れません」

「ホウ手づるがあつたかね？」

新米クツ屋はニコ／＼うなづいた。労働者仲間の一人が病気で田舎へかへるので、その後釜に入れそうだといふのだ。

「それでその田舎へ帰る男は、全協食糧労働の組合員なんです」

「ホウ」

「だからその組合の仕事も私が引き継ぐんです」

私は新米クツ屋の顔をも一ぺん見直した。話は逆に、組合の仕事を引き継ぐ為はこの学生が工場へ入るのだらうが、わづか二ヶ月の間によくここまで飛躍したものだと思つた。しかしこの男ならたしかにやれるだろう。口先ばかりだつた従来の学生に、これは新しい型だと思つた。(完)

昭和六年十一月一日付 「九州新聞」より

徳永直に関する一つの謬論

— 没後五五年を迎えるにあたって

金野文彦

徳永文学は依然として正当に評価されていない現状がある。むしろ、本会や佐藤三千夫記念会などで、徳永直を正当に評価しようという追想や評論の活動はある。

しかし、書店に並ぶ書籍などで徳永直をまつとうに評価しているものがいくつあるであろうか。岩波書店のような出版社も同類の一つであることは嘆かわしい限りである。いや、これが中央出版界の文芸評論の水準なのであるか。徳永直の作品・「がま」「あぶら照り」などを『世界』に掲載した岩波書店が、真向から徳永直を誹謗中傷する評論集を発行しているのはどのような意図からであろうか。

川西政明『新・日本文壇史』(全一〇巻、刊行中)、第四巻「プロレタリア文学の人々」はその典型である。私は、刊行予告の項目を見て、これは今までのプロレタリア文学否定論の枠を出ることはできず、過去の類似の文章の焼き直しにすぎないだろうと予想したが、案の定的中した。職業的文筆業者であるが、基本的な資料の扱いを知らないのか、写真の誤用などがある。インターネットを過信したにしても、小林多喜二の写真を朝鮮人作家・金龍済としている(一五三頁)など杜撰というほかない。(一応二刷で訂正)徳永直の妻となる佐藤トシヲは宮城県登米町日根牛(正しくは同町寺池地内)とするなど挙げればきりが無い。これ以上に、杜撰さを通り越している所業を行っている。

「二丁寧にも本書では、「日本人サトウ」を論じている。だが、川

西のこの本での『日本人サトウ』論は徳永の真正「日本人サトウ」を丸写ししているだけでなく、ヤマ勘による誤りの上塗りを行っている。挙げればきりがなくなるので二・三の例に止めておく。

一つには、佐藤三千夫の容貌の記述である。(二・三頁一〇―一二行目) ウラジオストク渡航前とされる写真と日本共産党史資料室所蔵の複製写真を混同している。前者は、背広姿で厳しい闘争に入る前の写真であるから、あご骨が目立たぬほどに肥えているのである。後者は、闘争に入った厳しい環境で撮った写真なので、やせてあご骨がはつているのである。着衣はルパシカである。該当する写真を実際に検証しないからこういうことが起きるのである。

ちなみに、渡航前とされる写真は、徳永直の誤認である。正しくは、ウラジオストクの木村商店一同の写真からのトリミングである。本会の和田崇氏が石巻市の佐藤家を訪問した際に気づき修正してくれたのである。私も徳永の誤認をそのまま追認していた。ここに記して自分の誤りを公しておく。

同所は、徳永直の事実誤認をそのまま引いている。旧沼沼中学の同盟休校事件は、一九一七年―大正六年で、佐藤三千夫の就職先は、「木村格商店」ではなく、「木村格(つつしむ)商店」である。

また、反戦活動の同志について、「日本人サトウ」では片山潜を記述はしているが、ほかには「星一」や高瀬清の名前が挙げられているだけである。なぜ川西は、野中誠之(ルビは、のなか まさゆき)―正しくは「せいし」、間庭末吉、児玉三郎を記述できるのであるか。

結論的にいうと、川西政明の「徳永直論」は、剽窃だらけで記述の基本がでたらめである。また、徳永直文学の柱である労働や戦争と平和を完全に捻じ曲げている。許しがたいことに、徳永家のブラ

イバシーを侵害している。

「日本人サトウ」は、佐藤三千夫についての事実誤認がある。だが、このことをもって、徳永直の業績を否定することができない。なによりも、東アジアの広範囲に及んだ日本の「シベリア出兵」に反対し、果敢に平和と友好を訴えた宮城県出身の青年の姿を本格的に描いた徳永の功績は大きい。佐藤の行動は、決して孤立したものではなかった。現地、ソビエト政権や極東共和国の傘下、日本人反戦グループばかりでなく在外朝鮮人なども結んでいた。日本国内の反戦非戦の労働運動や吉野作造・石橋湛山らの知識人とも根底で結びついていたのである。

徳永文学の重要な柱の一つである戦争と平和を、自分自身の身内に発見したのである。さらにいえば、佐藤家の人々を始め、妻トシヲの生地登米の伊藤政雄や、首藤直一郎らの農民運動家なども共に「日本人サトウ」のある意味で執筆者だったのである。

私もまた、徳永らによって創立された佐藤三千夫記念会の一員として、現時点における佐藤三千夫について根本史料を挙げて説明することができ、徳永直を始め、「日本人サトウ」にかかわる人々と共に研究・運動・学習教育を進めてきただけに、川西政明のような謬論に黙っていることはできない。川西のこの本は即刻廃棄されなければならないし、岩波書店は出版社としての責任を果たさなければならぬ。

徳永直没後五五年の区切りの年に、私たちは作品を丁寧に読み解くことで、徳永文学の神髄を追究していかなければならない。このことが徳永直を記念する道である。

(宮城・佐藤三千夫記念会事務局長)

『太陽のない街』の比喩表現

和田 崇

拙稿「戦間的なヒロインたち―『太陽のない街』におけるロシア小説の受容―」（『日本文学』二〇一三年二月号）では、『メス・メンド』と『セメント』という二つのロシア小説が『太陽のない街』に与えた影響について、形式（文体や構成）と内容の二つの側面から比較を試みた。本稿では、その中でも言及した『太陽のない街』の文体の特徴について、クロローズアップして考えてみたい。

『太陽のない街』の文体を語る上で有名なのは、作品の冒頭部、摂政宮の行啓で交通が遮断される様子を描いた次の場面である。

電車が停った。自動車が停った。――自転車も、トラックも、サイドカーも、まっしぐらに飛んで来ては、次から、次へと繋がって停った。（31頁）

短いセンテンスでつながれたテンポの良い文体が特徴的である。

このことは、これまで刊行された『太陽のない街』収録本の解説、または多くの論文でも指摘されてきたことであり、今さら説明する必要はないかもしれない。しかし、冒頭の印象があまりに強すぎるせいから、これ以外の文体的特徴はほとんど指摘されてこなかった。

『太陽のない街』を文体に着目しながら読むと、もう一つ別の特徴があることに気づかされる。それは、直喩法の修辭が多く用いられていることである。直喩法とは、「AのようなB」という具合に、ある事物（A）によってもう一方の事物（B）をたとえる比喩表現のことである。

具体的に見てみよう。次の文章は、摂政宮の行啓に乗じて男がばら撒いたビラを、私服刑事が手に取って読むところを描写したものである。

私服の眼は、梢上の小鳥のように、活字と活字の間を飛んだ。

（33頁）

興奮した私服刑事の視線が、枝先から枝先へびよんびよんと飛ぶ小鳥のように移動し、焦点が定まらずにビラを読んでいる様子が目に浮かぶ。さらに、「文字」ではなく「活字」とすることにによって、私服刑事が「争議団」や「資本家」といった記号単位で文意を捉えていることを巧みに表現している。

こうした視覚的な比喩表現は、『太陽のない街』では多く見られる。また、この視覚表現に付随する特徴として、次のことも指摘しておきたい。

五台の自動車が、フィルムの影のように音もなく走り去るのを見た。（31頁）

空には星が、スクリーンの斑紋のやうに、吹き流されていた。

（113頁）

右の引用文では、「フィルム」や「スクリーン」といった映像機器が比喩表現に用いられている。このことは、当時の活動写真（映画）が大衆娯楽として人気を博したことを考えると、労働者の読者を意識した表現であると言える。

次に、視覚ではなく聴覚に訴える比喩も確認したい。次の文章は、争議団員たちが会社の雇った暴力団から徒弟を奪還し、車を急発進させるところを表現したものである。

パッ!! と、硝子板を圧搾するような音響が、劈ざいた。（68

(頁)

引用文として抽出し、じっくり読んでしまうと、「硝子板を圧搾する」という比喩は少し不思議に思える。それは、日常生活ではまず聞くことのない音だからだ。だが、ツルツルとした硝子板を絞ることから強い摩擦音が連想され、そのイメージとしての「音響」が、夜の静寂を劈く(「引き裂く」)スキル音と重なる。実に読者の想像力を掻き立てる表現なのである。

また、次の箇所は、もつと単純に音をたとえている。

国尾氏は、コントラバスのような太い声を出した。(71頁)

調停団の一人である講談社社長の国尾氏の声は、このように表現されている。モデルとなった野間清治も「コントラバスのような太い声」をしていたのだろうか。ある意味では貴重な証言(？)かもしれない。

最後に、登場人物の心理を描写したユニークな表現も紹介しておきたい。作品の中盤、争議団員が住むトンネル長屋に、東京仏教婦人連合会を名乗る貴婦人たちが突然現れる。洋装をした三人の綺麗な貴婦人は、長屋を一軒ずつ訪ねてまわり、やがて焚火をしていた女房たちのところへ近寄って来て声をかける。次の文章は、その女房たちの反応を描写したものである。

女房達は、小学生が途中で校長先生に行き逢ったときのように、黙つて、もじもじした。(89頁)

身分違いの人に突然声をかけられた時の様子を、大変わかりやすく表現している。廊下で校長先生と出会った時、何と声をかければよいのか、とりあえず挨拶でもしておこうか……と戸惑う。この感覚は誰でも一度は経験したことがあるのではないだろうか。

以上のように、『太陽のない街』では実に多彩な比喩表現が用いられている。同作を改めて読み直し、あなたのお気に入りの表現を探してみたいかがだろうか。

※本文の引用は『徳永直文学選集』(熊本出版文化会館、二〇〇八年五月)に拠り、引用文の下の括弧は、同書中の頁番号を示している。

杉野健一氏逝去

中村 青史

杉野健一(本名林敦)さんが亡くなった。二〇一二(平成二四)年一月一日のことであつた。梶原定義さんからの手紙で知つた。奥さんが具合が悪いとは聞いていたが、本人が逝ってしまうとは、全くの驚きと悲しみで一杯である。

熊本・徳永直の会が発足した当時の会員で、徳永直の会には物心両面で幾知れぬ貢献をされた。徳永直文学碑の前面石組が壊れた際には、その修理を無償でしていただいた。会の備品としてコピー機の寄贈もしていただいた。徳永直文学選集が出版されるやその販売に多大の尽力をなされたし、直文学読書会には仲間を連れて来られたし、孟宗忌の参加者が減った折など、多くの賛同者を動員して下さった。徳永直の会にとって、かけがえのない人であつた。

杉野健一さんは、生コン会社を経営されていたが、詩人でもあつた。私が最初に彼を知つたのは、ある詩の会の席であつた。六十年

ほど前の話である。その席に木庭克敏さんもおられた。一番若かったのは津留清美さんだった。杉野さんは一番年長者ではなかったかと思う。とにかくこわい人であった。鋭い発言をされていた。徳永直文学碑の建立打合せの最初の会合で、三十年ぶりぐらいに杉野さんに会った。やはり鋭い意見を述べられていた。

その杉野さんも、後年はおだやかになられ、不言実行の見本のよくな人になられていた。作品研究会で一緒された方々は、杉野さんはおとなしい人と思われていたに違いない。熊本・徳永直の会発足時からの人々が次々に消えてゆく。高光義明氏、森上幸義氏、木庭克敏氏、岩本税氏、そして杉野健一氏。

杉野健一さんのご冥福をお祈りしたい。



杉野さんと一緒に

徳永直文学散歩⑥

緒方宏章

『戦争雑記』

……母は気丈な女であった。四人の子供を抱えて、毎日細いながらも、煙をたてていった。

「一人一合扶持なんかで、食ってゆけるもんか」

区長さんのところから、出征軍人の遺族扶助米として、月に三度届けてくれる僅かの米袋を見るたびに、母は何かに欺されたもののように怒って、米袋を投げつけた。母は毎日、大きな箆を、天秤棒で担って、二十三連隊の営内に、残飯を担いに行った。毎日兵士が喰いあました飯や、釜の底に焦れついた飯や、残りの汁なんかを、一荷幾らで入札して買ってきた。そして近所の同じ貧乏な、お内儀さんたちを呼んで来て、それを頒けたり、売ったりした。

それで、父の出征したのは、新しく炊いた飯は、一度も喰うことがなくなつたが、とにかく、二度も三度も蒸しかえした残り飯でも、飢しい思いはせずに、私達は暮した。

私はその次の年、七歳で小学校にあがった。……



歩兵第二十三聯隊址碑(花畑公園)

ロシアの捕虜が、送られてきた。十三連隊が虜にした、ロスケの赤鬚が、練兵場の仮小屋の中に入れられる、というので、私達は村の人達と一緒に見に行った。

ロスケはみんな、背が大きかった。私が想像した通り、鬚が赤くて、眼がビイドロのようで、鈍間らしい風付であった。みな黒い箆のような帽子を、冠っていた。そして捕虜はみんな私達小児の顔を見て、ベチャクチャ喋りながら、ニコニコ笑って通った。

「ロスケが笑つとる！」

私達は随分、ロスケは意久地ないなあと思つた。銃も剣もとりあげられて、それでニコニコしている。私は何だか不思議に思えた。

私達は、学校のかえりに、廻り道して毎日のように捕虜を見に行った。

〔徳永直文学選集〕

より)

『戦争雑記』は、直の父が日露戦争に出征した当時のことを基にしている。当時、熊本城二の丸には歩兵第十三連隊が、花畑御殿跡地には第二十三連隊が駐屯していた。連隊は、共に第六師団として日露戦争に臨んでいた。



歩兵第十三連隊址碑(二の丸公園駐車場)

また、ロシア軍の捕虜は、将校が南千反畑に、下士卒が渡鹿練兵場(当時の大江村)の收容所に收容された。

「新熊本市史」通史編第六巻には、『戦争雑記』のロシアの捕虜に関する記述を収録している。

句集『寒祭』・労働を詠む

永田満徳

昨年、句集『寒祭』(文學の森)を上梓した。漱石の言う「俳句はレトリック」を駆使し、「生の実相」を迫る俳句を目指したものである。句歴二五年、全四二二句の中には「労働」に触れたものがあり、自注自解を試みた。

身一枚はがして起床明易し

八代高校勤務時代・三二歳から四〇歳までの間、家を熊本の花園に持ったため、後の四年間の生活は精神的にも、肉体的にも辛いものがあった。朝課外に間に合わせるために、五時半起床、眠い目をこすりながら、無理に起きて、そそくさと家庭を後にしていた。



渡鹿練兵場跡(大江)

残業やささくれし身や破芭蕉

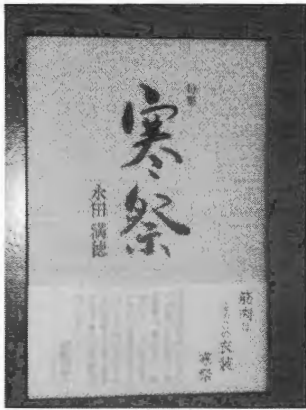
長距離通勤や残業で帰りは八時頃、家庭にいる、自由な時間が欲しい三時間しかなく、眠るために帰っていた気がする。ある時、玄関口の庭に向かって、こんな生活では自分の人生はいいのだろうかと思つたことがある。

通勤車月の出づれば旅となる

帰りは七時から八時頃なので、月の出を見ることがあつた。風景を見るために東側の席を取ることが多く、この時も東の空に名月がぼかりと浮かんでいた。時日々旅にして、旅を栖とするという境涯にあこがれて出来た句である。

通勤や蓮あれば蓮見て帰る

考查期間中、朝夕に時間的余裕があると、八代城を散策するのが常であつた。句になつているものが少ないが、桜、牡丹、梅の花、蓮など、何らかの見所があつた。通勤は大変であつたが、それなりの楽しみを見出していた。



定価…2667円+税
発行所…文學の森

会報60号発行へのカンパ（寄付）のお礼

会報の発行に対して、ご協力をいただき誠にありがとうございます。ありがとうございました。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

カンパ（寄付）をいただいた皆様（事務局受付順）

寺田 正 様
上妻 四郎 様
井上 英次 様
梶原 定義 様
高木 陽助 様
熊本県高等学校国語教育研究会（K5） 様

「徳永直」ホームページのご案内

徳永直のホームページを開設しています。「徳永直の会」の内容や過去の会報一号から三〇号まで掲載しています。「徳永直の会」で検索してください。

新規会員募集

会員を募集しています。お知り合いの方に、入会のお誘いをお願いします。また会員募集のためのアイデアがありましたら、お寄せください。

2012年度 会計報告

2012年1月～12月(単位:円)

収 入		支 出	
繰越金	109,159	事務費	13,220
会費(41人)	82,000	通信費	18,450
利子	32	総会関連費	8,647
寄付	56,000	熊本文化振興会関連	20,000
映画券売上	4,000	HP関連費	2,510
		会報印刷費	79,800
		映画賛助金	10,000
収入合計	251,191	支出合計	152,627
		残 金	98,564

- * 2012年度の会計報告は、総会時に行います。
- * 2013年度会費(2,000円)の納入をお願いします。
「孟宗忌」の当日、もしくは「総会」当日に、会費を集めさせていただきます。
または、「総会」後に振替用紙を送付しますので、お振り込みください。
- * 会費の「ゆうちょ銀行」への振替先
口座記号番号：01710-9-121371 加入者名：「徳永直の会」

第三十六回 孟宗忌のご案内

日時：平成25年2月10日(日)

①午前11時～午前11時半 徳永直文学碑 前

(立田山登山口、泰勝寺入口)

・ 献酒、献花。経過報告。

②午後2時半～午後4時半 熊本近代文学館ロビー

・ 朗読『「赤い恋」以上』

・ 講演 講師：谷口絹枝氏(熊本大学非常勤講師)

演題『「赤い恋」以上』

③午後5時半～午後7時半 懇親会(場所未定)

(会費3500円：当日受付)

住所変更等の連絡のお願い

住所変更等がありましたら、左記までご連絡ください。

〒862-0955 熊本市中央区神水本町6-40 緒方 宏章

お知らせ

☆ 総合文化雑誌「KUMAMOTO」の紹介

季刊誌800円 年間購読料3000円

申込先：さろん・ど・漱雲内 NPO法人 くまもと文化振興会

TEL・FAX096-343-8806